

批評

武岡暢著『生き延びる都市——新宿歌舞伎町の社会学』（新曜社 2017年）

有馬恵子*

本書は新宿歌舞伎町を「歓楽街」としてではなく「地域社会」として描いたモノグラフである。従来都市社会学は、住人を主体とした町内会、自治会のメカニズムを主な研究対象としており、本来対象とされるはずの都市的現象はあつかわれてこなかった。それに対して武岡暢は、歌舞伎町は外的な「浄化」の働きを受け流しながら歓楽街であり続けており、住民を主体としない「地域社会」であることを指摘した。本書の目的は、「移動する人びとを含めた各主体のネットワーク、彼女ら彼らの職業への入職、離職、さらには空間の供給、管理」（6頁）といった観点から、「地域社会」の再生産メカニズムを解明することである。本稿では、武岡が歌舞伎町の『「地域社会」の社会学』をどのように析出したのか、さらに「生き延びる都市」とは何か、の2点に着目する。そして結びとして本書の研究史上の意義と課題について論じる。

1 「地域社会」の社会学

本書が対象とする「地域社会」とはいかなるものだろうか。武岡は、「歌舞伎町という対象を歓楽街に還元して理解することはしない。歌舞伎町を『地域社会』として捉えたとき、そこにおける社会的活動の重要なパターンが歓楽街性である」（7頁）とし、「従来の地域を対象とした社会学が、対象設定の段階で、強すぎる前提が置かれており、本来であれば個別に扱うのが望ましい複数の要素が重ね合わされていた」（7頁）ことを指摘する。たしかに『新版キーワード地域社会学』では、地域社会は「地域性と共同性の2つの側面をあわせもつ概念」と規定される。しかしこの前提は「地域コミュニティ」以外のコミュニティが忘れ去られており、「地域社会＝地域コミュニティ」ではない現象を、地域社会学、都市社会学の対象から除外することになる。本研究では、地域研究で自明視されてきた「地域コミュニティ」の概念は用いられない。武岡は地域社会の地域性と共同性の「強すぎる前提」を解除することを本書の起点とした。

第1章では、農村社会学、地域社会学と都市社会学が対象としてきた「地域社会」を論じる。物理的な空間としての「地域」の設定は、アメリカの農村社会学者、チャールズ・J・ギャルピンの、「農村コミュニティ（a rural community）」（Galpin 1920）に遡ることができる。ギャルピンが対象としたアメリカの農村は広大な空間に農家が散居する。ギャルピンは住民のサービス機関の利用状況を分析し、「地域の範囲」を設定した。しかし「コミュニティ」概念の規定的要素である「地域性」がいかなる範囲なのかを問うギャルピンの方法論は、その後日本で引き継がれなかった。さらに地域社会学では公害問題などの社会的背景もあり、「地域」を便宜的に設定して、その「主体」である住民の問題に取り組む研究が主流であった。このように、従来の地域研究の基軸は「主体＝住民」としてとされてきた。住民をひと括りにすることでの困難や批判はあるものの、地域研究は住民を主体とした「地域性」と「共同性」の問題として扱われてきた。

次に、地域研究のマクロな視点として、都市社会学、とりわけシカゴ学派、新都市社会学派とそれに連なる学説を検証する。武岡はここでも論点先取的に、「共同性」を前提にしてしまう視座、定住する「主体」にのみに着目してしまうことへ疑いの眼差しを向ける。そのなかで、必ずしも共同的ではない「住宅街＝居住の地域空間」にアプロー

*立命館大学大学院先端総合学術研究科 2019年度入学 公共領域

チすることに成功している例として、モリス・ジャノウイツ『有限責任のコミュニティ』に着目する。ジャノウイツは「十全なコミュニティ」ではなく「限定された共同性」を見出し、地域コミュニティの「発見」「解体」という二分法を相対化した。

これらの先行研究を明らかにした上で武岡は、「地域社会」としての歌舞伎町を設定するために、従来の地域社会学、都市社会学で自明視されてきた「空間（地域）」「居住」「コミュニティ」の重ね合わせから脱却することを明示する。まず、歌舞伎町を「地域社会」として記述するために「空間、移動、活動に焦点を当てる」（46頁）ことで、「地域社会」という語を「住民」と「コミュニティ」の癒着から切り離れた。次に、「交替していく主体によって活動が再生産されることをもって『地域社会』の再生産と捉える」（46頁）前提を示す。さらに、諸主体の活動領域を整理し、活動の再生産メカニズムの三つの課題設定に取り組むことになる。第1に、地域をそこにおける主体とその活動の編成を成り立たせ、規定し、相互作用する「場」として捉え直すこと。第2に、そこに生活する人々とともに、出入りする人々にも焦点を当てること。第3に、出入りする人々の焦点化とも関連して「地域」で実践される活動に着目すること、である。このように「地域社会の社会学」とは、ある時間設定の区切りの中で「場」における人々の活動の構造を捉え、メカニズムを解明することである。農村社会学、地域社会学、そして都市社会学。武岡はそれらにまたがる「地域」「都市」「場」「空間」の諸言説を整理し、歌舞伎町を「地域社会」として看取することを可能にした。

2 生き延びる都市

本書の第2章では、歌舞伎町の歴史を記述、分析する。第3章から5章では、「『浄化』の働きを受け流しながら歓楽街であり続けている」（13頁）状況を参与観察し、歌舞伎町がいかなる維持、再生産のメカニズムにより再生産されるのかを考察する。歌舞伎町は振興組合やパトロールのような中間集団の「集会的」な活動と、スカウトやキャストのような「個別的」な活動、そして「集会的」な労働としてのキャバクラやホストに対して、「個別的」な労働としての性労働が維持されている。では、それらの活動や労働は「集合化」と「個別化」の準拠のなかで、どのように再生産されるのだろうか。歌舞伎町の諸活動が生産されるのは、1) 自治体やビルオーナー、不動産屋の活動領域である「雑居ビルと地域」、2) 風俗産業の活動領域である「雑居ビル内部の部屋＝店舗空間」、3) 民間パトロールや客引き、スカウトの活動領域である「ストリート」である。第3章では「地域」「雑居ビル」という活動領域に参与している警察、自治体、ビルオーナー、不動産業者などへのインタビュー、参与観察、活動の記述、分析をへて、諸活動の相互活動の中で生まれるパターンとメカニズムを解明する。第4章では、風俗産業の具体的な経営と労働のパターンとメカニズムから、歌舞伎町の再生産メカニズムの中で、「地域」「雑居ビル」と、「ストリート」とのあいだに位置する「店舗」の活動領域を析出する。第5章では歓楽街の再生産メカニズムの重要な一部分としての「ストリート」を描く。

結論として第6章では、歌舞伎町が「生き延びる」ための再生産のメカニズムを分析する。歌舞伎町の店舗空間は極めて不透明で内実の把握が困難である。したがって客引きとスカウトは、風俗営業に必須の要素である客とキャストを供給する重要な役割を担う。客引き、スカウトらは、絶えず外界から人々を流入させる媒体となる。そして雑居ビルと店舗の不透明性を「媒介＝分離」するのは、不動産業者と振興組合である。このように「生き延びる都市」としての歌舞伎町は、ストリートと不可視な内部空間で活動、労働する「住民」により形成される。このことは、歌舞伎町はこれまで観念されてきた地域の共同性ではなく、流動的で異質な「活動主体」を中心とした「地域社会」であることを示している。武岡は従来の「住民」に限らない「地域社会」の再生産メカニズムを解明した。

結びとして、本書の研究史上の意義と課題について論じる。武岡は本書で社会学の古典的な秩序問題に真正面から取り組んだ。完成度の高い本書に異論を差し込む余地はないが、以下の2点について言及したい。1点目は、本書では歌舞伎町を「絶海の孤島」として描いているが、実際の都市は歓楽街が近接しており、例えば歌舞伎町から六本木へ移ったり、あるいはその逆があったり、他の歓楽街との出入りや流動もあるように思われる。他の歓楽街との相互行為のメカニズムはあるのだろうか。2点目は、武岡は歌舞伎町の活動を担う中間集団を「活動主体」して分

析した。しかしながら、武岡が対象とした出入りする「活動主体」は、あくまでも歌舞伎町の商業活動にかかわる人びとであり、一般来街者との相互行為はほとんど注目されていない。一般来街者は「生き延びる都市」のなかでいかなる役割を果たしているのだろうか。以上のことから、武岡の研究から導出された地域研究の成果と課題を引き継ぎながらも、中間集団を他の同様の地域でも主体とすることへの検討に加えて、一般来街者を活動主体としてとらえるための方法論の検討、さらなる事例研究が必要であろう。本書に影響を受け、励まされた研究者は多いのではないだろうか。私もそのひとりである。本書をこれからの研究の参考としたい。

